

## 「ともに歩む教会のため～交わり、参加、そして宣教」

### 第16回シノドスについて

教皇フランシスコは、2023年10月にローマで第16回シノドス（世界代表司教会議）を開催すると発表されました。テーマは、「ともに歩む教会のため～交わり、参加、そして宣教」です。

「シノドス」とは、「ともに歩む」という意味のギリシア語で、一定時に会合する司教たちの集会のことです。世界中の司教たちが教皇とともに歩むという第二バチカン公会議の精神を保つために、1965年、教皇パウロ六世によって設置したものです。

これまでのシノドスでは、新福音化、家庭、若者、アマゾンなどのテーマで行われましたが、今回は、まさに、ともに歩む教会のあり方としての「シノダリティ（シノドス的）」が主題となっています。「ともに歩む教会」としての交わりのあり方、共同体の多様性の中でともに参加すること、そして宣教の使命をよりよく務めていくあり方を探ろうというプロセスです。

教皇フランシスコの意向によって、今回のシノドスの歩みは分かち合われる旅であり、教区レベルから始まる分かち合いと振り返りの積み重ねがシノドスの大切な歩み、未来に向かう旅となります。

私たちがこれから始めていく作業はその第一段階で、ヴァチカンで準備された10のテーマを分かち合い、大阪教区として2022年1月までにまとめていきます。第二段階は2022年秋から地域・大陸レベルでの作業があり、最終段階が2023年10月のローマでのシノドスの総会となります。この総会から1年後くらいにシノドスの成果を踏まえた教皇の使徒的勧告が出され、それを受け止めて教区のあり方や日本の教会の現実を見つめていく営みが2024年以降に本格化することでしょう。

準備の分かち合いを通してシノドス的な教会体験を積み重ねていき、21世紀の福音宣教に向かう教会となるようにと祈ります。

大阪教区シノドス担当チーム

2021年10月27日

それぞれの場で次の「シノドスのための祈り」を用いることができます。ご活用ください。

## シノドスのための祈り

聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立ち、  
あなたのみ名によって集います。  
わたしたちのもとに来て、とどまり、  
一人ひとりの心にお住まいください。  
わたしたちに進むべき道を教え、  
どのように歩めばよいか示してください  
弱く、罪深いわたしたちが、  
一致を乱さないよう支えてください。  
無知によって誤った道に引き込まれず、  
偏見に惑わされないよう導いてください  
あなたのうちに一致を見いだすことができますように。  
わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、  
真理と正義の道を迷わずに歩むことができますように。  
このすべてを、  
いつどこにおいても働いておられるあなたに願います。  
御父と御子の交わりの中で、世々としえに。  
アーメン。



For a synodal Church  
communion | participation | mission

このロゴマークの背景にある大木が知恵と光に満ちて空に向かって伸びています。キリストの十字架を表現する、深い生命力と希望のしるしです。

この「命の木」は太陽のような輝きを放つ聖体を運ぶ。手や翼のように開かれた水平な枝は、同時に聖霊をも暗示しています。

人々は「共に歩む」という意味のシノドスの語源にあるように、人々は歩み続けています。神の民は止まっているわけではありません。人々は、この「いのちの木」から吹き込まれる力によって結ばれて、歩み始めます。このシルエットは、全人類の多様性を表現します。子供、若者、お年寄り、男性、女性、信徒、修道者、家族、独身者、健康な人、障害のある人。それは、喜びのしるしである鮮やかな色によって、さらに強調されています。司教や修道者は先頭に立っているのではなく、人々の間にいるのです。ごく自然に、先頭に立っているのは子供たち、若者です。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」と

言うイエスの言葉を連想します。

# シノドスの意義や狙いのご紹介

教皇庁シノドス事務局からはそのための準備文書、手引書などが出されています。全文は中央協議会の HP でご覧いただけますが、一部を抜粋してシノドスについての意義や狙いを紹介します。

「このシノドスが開催されている背景を思い起こさせます。いくつか例を挙げると、パンデミック、地域紛争や国際紛争、気候変動による影響の増大、移住者、さまざまな形態の不正義、人種差別、暴力、迫害、人類全体に渡る不平等の拡大などです。教会においても、『あまりに多くの聖職者と奉獻生活者による性的虐待、パワーハラスメント、モラルハラスメントのために』、未成年者や弱い立場の人々が経験した苦しみが背景にあります。・・・このような状況の中で、シノダリティは、聖霊の働きによって教会が刷新され、神がその民に語られることとともに耳を傾ける道を示しています。しかし、こうしてともに旅することにより、わたしたちは神の民として互いにより深く結びつけられるだけでなく、仲間であるキリスト教諸派や他の信仰伝統とともに、人類家族全体を包み込む預言的なあかしとして自分の使命を追い求めるために派遣されます。

「教会が福音をのべ伝えることができるように、今日、この「ともに旅をする」ことが、さまざまなレベル（地方レベルから世界レベルまで）でどのように行われているでしょうか。また、シノド斯的教会として成長するために、どういったステップを踏むように霊はわたしたちを招いているのでしょうか？」

「今回のシノドスの目的は、神の民全体として、聖霊が教会に語っていることに耳を傾けることにあります。そのためには、聖書の中の神のみことばと教会の生きた聖伝とともに耳を傾け、そしてさらに、互いに、とくに周縁部にいる人々に耳を傾け、時のしるしを識別することが必要です。

「シノド斯的教会は、そのメンバー一人ひとりの参加を通して、共通の使命を追求するために、交わりの中で前進します。」

「神の民全体が、長期的によりシノド斯的な教会になるための道をどう前進していけばいいか、ともに識別する機会を提供することにあります。」

振り返り、分かち合うための10の質問は、「シノダリティの経験という宝を集めるために、幅広い意見聴取のプロセスを促進することです。」その際、「教会の中で何らかの役割や責任を担っている人たちの声だけでなく、貧しく排除された人たちの声も、その場を見つけることが基本的に重要になります。」

教区のあり方にも大きな影響を与えることが準備段階での経験の目的だと手引書に書かれています。「この教区フェーズは、小教区と教区がともにシノドスの旅に出会い、体験し、生きていく機会であり、その結果、それぞれの地域の状況にもっとも適したシノドス的な方法と道筋を発見したり、発展させたりすることができ、それが最終的には、シノドス的な道を歩む地方教会の新しい生活様式となるのです。・・・プロセスの過程の中で、また将来的に向けて、「シノドスになる」ことの実践と経験を促進し、発展させてほしいのです。」

「このシノドスは、教会の交わり、参加、宣教を生きる、新たな生活様式を促進することを目的としているので、シノダリティの道をとともに前進するためには、履行していくフェーズが重要となります。この履行は、世界中のすべての地方教会に行き渡ることが目指されており、今回のシノドスのプロセスは、神の民全体をその出発点とし、また到達点としています。」

([https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2021/10/16synod\\_vademecum\\_jp20211012.pdf](https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2021/10/16synod_vademecum_jp20211012.pdf))

日本のカトリック教会も、第二バチカン公会議（1962～1965年）の成果として、刷新を求めて歩み始めました。特に1981年の教皇ヨハネ・パウロ二世の日本訪問により、1983年には「日本の教会の基本方針と優先課題」という司教団文書が出され、1987年に、第一回福音宣教推進全国会議（NICE-1）が京都で開催され、たくさんの分野にわたる14の提案が採択されました。その後、1993年に長崎で第二回福音宣教推進全国会議（NICE-2）が「家庭」をテーマに開催され、様々な具体的な刷新に向かう動きが始まり、「ともに」は日本の教会の方向を示す言葉としてあちこちで語られ、使われました。また、大阪教区でも1995年の阪神・淡路大震災を受け止めて、「新生計画」という教会刷新の運動が始まりました。「交わり」と「証し」がこの新生計画の標語でした。シノドスが目指す「ともに旅する」教会は、ここ数十年の私たちの歩みとも重なっていることを確認したいものです。